

インターネット世界の中の 大学図書館の役割

土屋俊
(千葉大学)

考え方

- これまでの10年
 - NII以来の展開
 - 図書館との関係では「電子図書館」
 - 学術雑誌の電子化、インターネット化
- これからのX年
 - 大学はあるけど、大学図書館はなくなる話
 - 大学図書館はあるけど、大学はなくなる話
 - 望ましい将来とは？
 - 学習環境
 - 研究環境
 - 社会貢献

インターネット化の短い歴史

- 1970年代: 技術開発の時代
 - WWWを除くほとんどの標準ができていた
- 1980年代: 学術利用普及の時代
 - 研究者への普及
 - ARPAからNSFへ
 - 国際的普及(日本の接続)
- 1990年代(1993年以降): インフラ化の時代
 - NII(National Information Infrastructure)
 - WorldWide Webの登場
 - 一般社会への普及

このころ図書館では、

- 「自動化」「機械化」
 - 目録の電算化
 - 保存のための電子化(出版社も)
- 図書館間協力・学術情報システム
 - ILL
 - 学術情報センター
- 国際的には、「シリアルズ・クライシス」
 - 寡占化・価格高騰
 - 「ジャパン・バッシング」

インターネット普及と電子図書館(の無関係)

- 1995年の「悲劇」
 - 「電子図書館」ブーム
 - 保存のための電子化
 - CD-ROMのネットワーク利用
 - 「ペーパーレス」図書館
 - 日本におけるインターネット普及は1996年
 - 「電子図書館」建議はインターネットを知らない？
 - 「来館型」電子図書館！？！？
 - 学内ランのみの普及
 - 「情報処理教育」の彷徨
 - 研究者による不思議な「紙」信仰

結局、

- カタログ電子化の達成
 - NACSIS-CATの完成
 - NACSIS-ILLの普及
 - WebCAT登場
 - OPACも展開
- 電子ジャーナル時代の到来
 - 保存のための電子化から頒布の電子化へ
 - 大手出版社の展開
 - 寡占傾向
 - 電子ジャーナル化

加えて、日本では「大学改革」

- 大学設置基準の大綱化
 - 大学における教育機能の見直し
- 「大学院重点化」
 - 研究機能の見直し
- 「科学技術基本計画」(第1期、第2期)
 - 基礎研究振興(第1期)
 - 重点4分野
- 行財政改革としての国立大学改革
 - 法人化

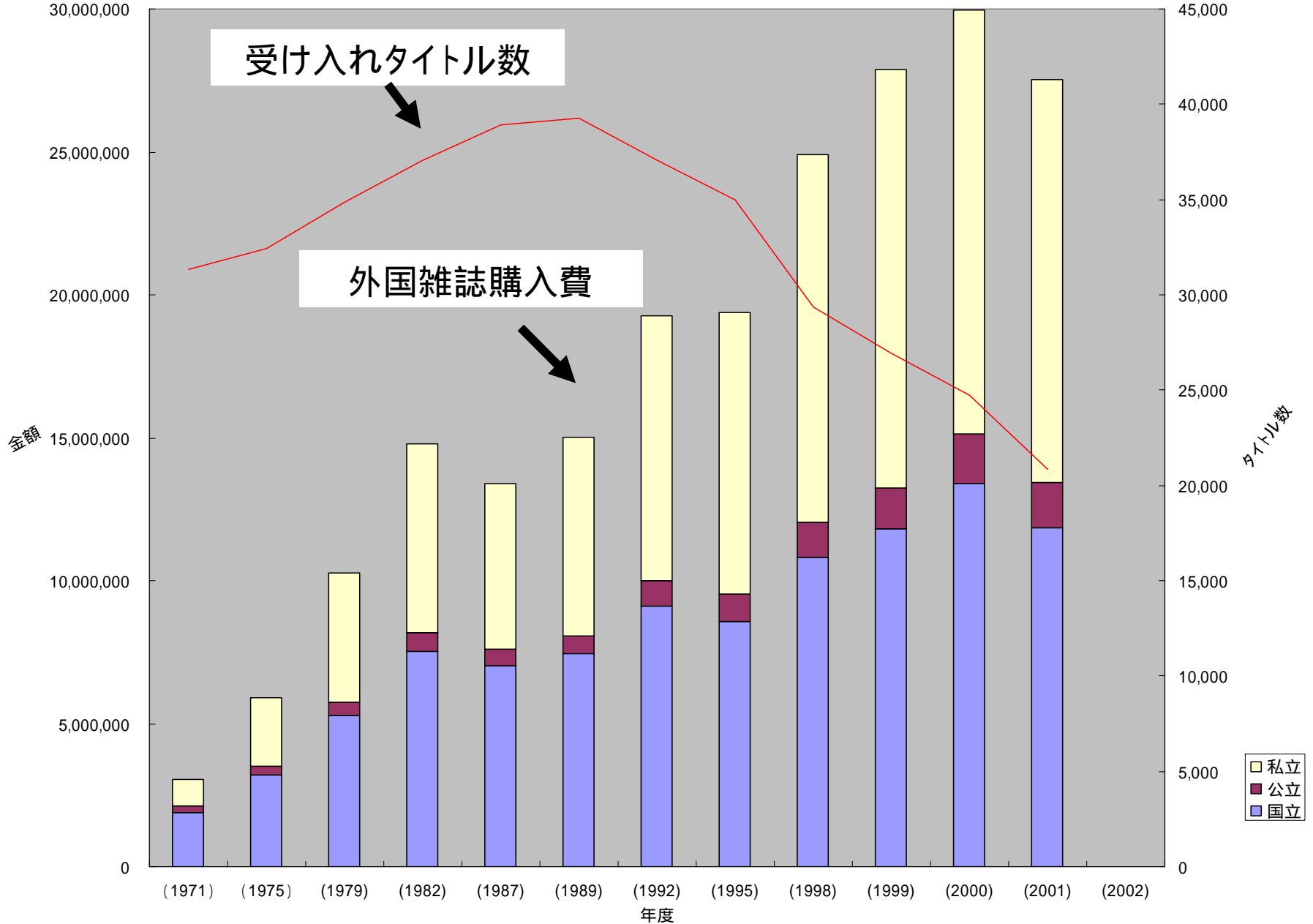
図書館にとっての失われた10年間

- 大学改革における無視
 - 教育改革の空洞化(教養部廃止の功罪)
 - 掛け声だけ(「自分で考える」)
- 科学技術基本計画における無視
 - 資料基盤拡充は触れられず(かつての科学技術振興ではかならず触れられていた)
 - 購読タイトル半減
 - 外国雑誌センター館機能の空洞化
- 的外れの「先導的電子図書館」プロジェクト
 - インターネット状況の評価遅れ、資料の電子化のみ

単位:千円

日本国内図書館の外国雑誌購入費および受け入れタイトル数

但し1982年度までは和雑誌も含む



1990年代におけるILLの実態(雑誌:図書、和:洋、分野別)

1)NASCSIS-ILLデータ		1994		1996		1998	
	総数		468,218		637,860		881,786
図書雑誌内訳	図書	21,495	4.64%	29,798	4.72%	40,937	4.69%
	雑誌	442,370	94.48%	594,962	93.27%	820,510	93.05%
	不明	4,353	0.93%	13,100	2.05%	20,339	2.31%
雑誌内の和洋内訳	(和雑誌)	91,752	20.74%	132,887	22.34%	195,375	23.81%
	(洋雑誌)	350,618	79.26%	462,075	77.66%	625,135	76.19%
	(機関)	236		336		554	
2)外国雑誌センター館 分野別							
	医学生物系	489,893	59.87%	518,216	58.75%	593,622	60.75%
	理工学系	201,644	24.64%	198,393	22.49%	177,846	18.20%
	農学系	87,743	10.72%	112,638	12.77%	132,974	13.61%
	人文社会系	38,993	4.77%	52,825	5.99%	72,685	7.44%
		818,272		882,072		977,127	

要するに

- インターネット化の過去の10年は大学図書館にとってそれほど幸せな時代ではなかった
 - 大学予算構造は変わらない(図書館は何も決められない)
 - 文部省予算は、電子化にシフトする
 - 国際的圧力は図書館にかかる
 - 著作権の問題も図書館が引き受ける
 - 副学長制の普及による図書館長の学内的地位の低下

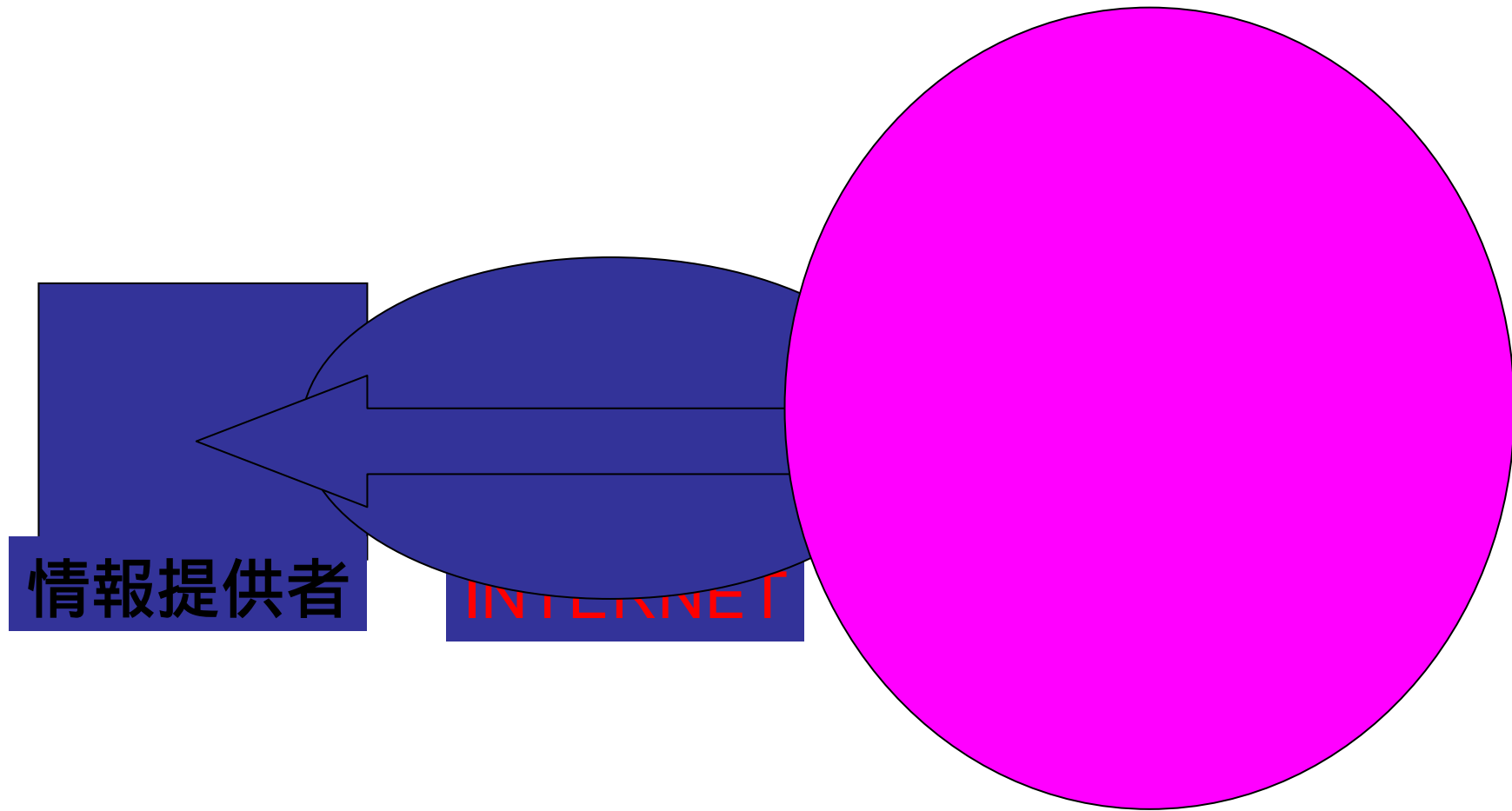
インターネット時代に 図書館は要らないのか？

不要である

- 学生は図書館にもともと行かない。Googleがあれば十分。ますます行かない。
- コンテンツは研究室、教室へ直接届けられる。契約は会計処理にすぎない。あるいは、pay-per-useか。
- 保存は、生産者が行う
- レファレンスは、日本に一箇所あればよい

要するに、従来の役割のための図書館は不要

仲介者は不要であるモデル



インターネット時代における高等教育

- インターネット普及との因果関係はわからないが、
 - 知識社会化による専門再教育の必要
 - 専門知識陳腐化の高速化
 - 在職者、一度卒業者による教育機会需要増大**
 - (すでに北米では進行中)
 - 在職のままの学習、24歳以上の学生
 - 遠隔学習 (Park University: remote vs face)
 - キャンパスの分散化
 - 短期集中学習
 - Value for money意識の増大

これに従来型の日本の高等教育は対応できるか

インターネット時代における「研究」

- 学術情報流通形態の変貌

- 「もの」依存からの脱却：電子ジャーナル

- 成果公表手段の自己管理へ？

- インターネットによって可能(頒布コストのゼロ化)

- 「自己」管理は無理でも、大学等による管理

- (わき道)近年の知的財産取り扱い規則における著作権の扱いには問題

- メタデータのハーベスティングの普及

- Pay-per-"use"のリアリティ

従来型大学図書館機能の崩壊？

電子ジャーナルとは何か

- 内容(コンテンツ)は従来の学術雑誌掲載論文
 - ピア・レビュー済(品質保証は保障済み)
 - タイトル、巻、号、ページの概念も存続(引用は必要)
- 配送方式の画期的変革
 - 出版者サーバからインターネット・学内LAN経由で利用者に直接(置き場としての図書館は不要！)
- 利便性の画期的向上
 - 同時複数利用
 - 新しい表現方式(動画像、音声、visualization等)
 - ハイパーリンクによるメタデータとコンテンツの連携
 - Web of Science, Scopus, GeNii, PubMed,

契約：物品購入から使用許諾へ

- 印刷冊子体ジャーナルの購入・管理は物の管理
 - 契約は物品購入
 - 管理は図書に準じる
- 電子ジャーナルはサービス提供にかかわる許諾
 - 役務契約でも前払い可能
 - ものがないときに、何を管理するのか
 - 契約を管理。でもそれは図書館の仕事？
- Walk-in 利用、ILL利用、教材利用など面倒なことはあるが、、、

予算管理：タイトルごと予約購読から データベース(パッケージ)へ

- これまでは、(日本の場合)研究者が研究予算の運用として購入雑誌を決定。図書館はタイトルについて、予約契約を締結
- これからは、出版者が自社刊行雑誌をデータベースとして提供
- いずれにせよ、図書館は選択しなかったし、これからもしない
- Big Deal の必然性を認めるしかない
 - Value for Moneyが大きい(賛成)
 - 囲い込みに過ぎない、選択が(反対)

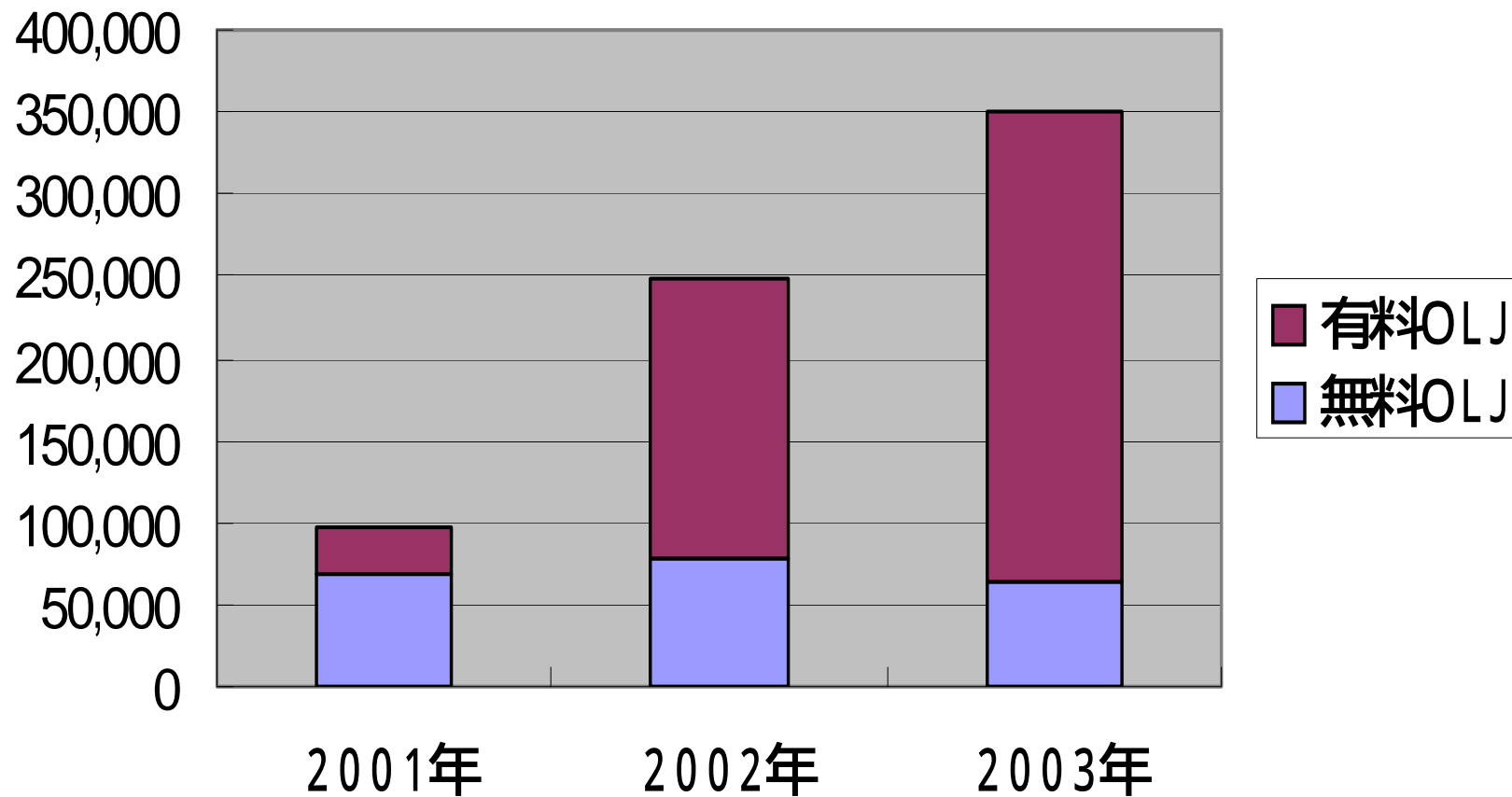
電子ジャーナルコンソーシアム

- 2002年からの契約を念頭において2000年9月設立
- 出版社との直接交渉を原則(当初は、主要5社ターゲット)
- 契約条件の改善(1大学1サイト原則、ILL、学外者利用、
プライス・キャップ等)
- 利用環境の改善(ミラー・アーカイブ設置、利用者講習担
当者研修、統計情報の正確化(COUNTER対応)等)
- 予約購読意思決定システムの改善、「集金」システムの確
立の推進(「全学予算化」等)
- ただし、契約は大学ごと(条件は国立大学全体を一つのコ
ンソーシアムとみなさせる)
- 相当程度の成果:「2002年は(日本の国立大学の)電子
ジャーナル元年」
- 現在40社近くと交渉

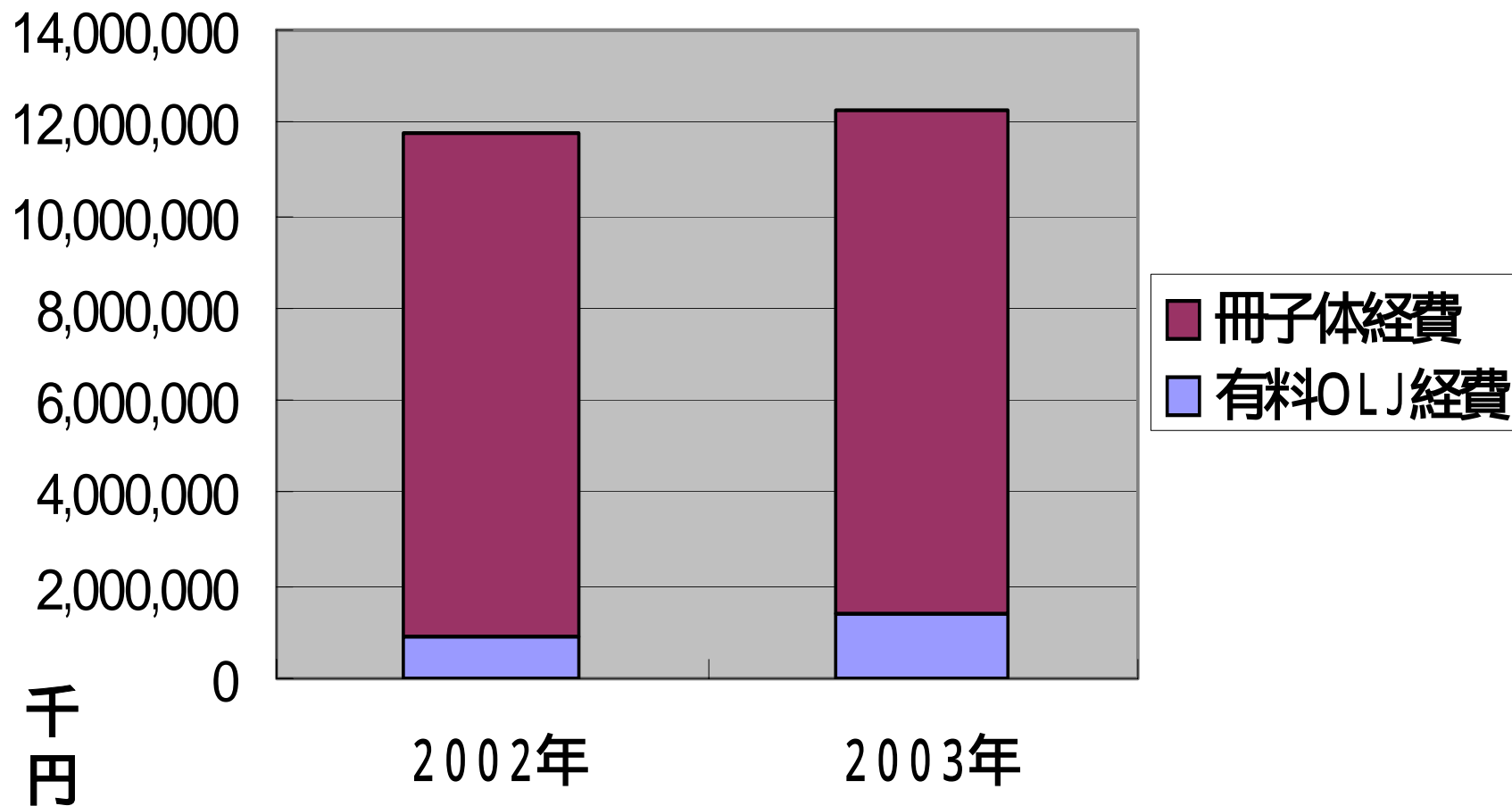
1990年代におけるILLの実態(雑誌:図書、和:洋、分野別)

1)NASCSIS-ILLデータ		1994		1996		1998	
	総数		468,218		637,860		881,786
図書雑誌内訳	図書	21,495	4.64%	29,798	4.72%	40,937	4.69%
	雑誌	442,370	94.48%	594,962	93.27%	820,510	93.05%
	不明	4,353	0.93%	13,100	2.05%	20,339	2.31%
雑誌内の和洋内訳	(和雑誌)	91,752	20.74%	132,887	22.34%	195,375	23.81%
	(洋雑誌)	350,618	79.26%	462,075	77.66%	625,135	76.19%
	(機関)	236		336		554	
2)外国雑誌センター館 分野別							
	医学生物系	489,893	59.87%	518,216	58.75%	593,622	60.75%
	理工学系	201,644	24.64%	198,393	22.49%	177,846	18.20%
	農学系	87,743	10.72%	112,638	12.77%	132,974	13.61%
	人文社会系	38,993	4.77%	52,825	5.99%	72,685	7.44%
		818,272		882,072		977,127	

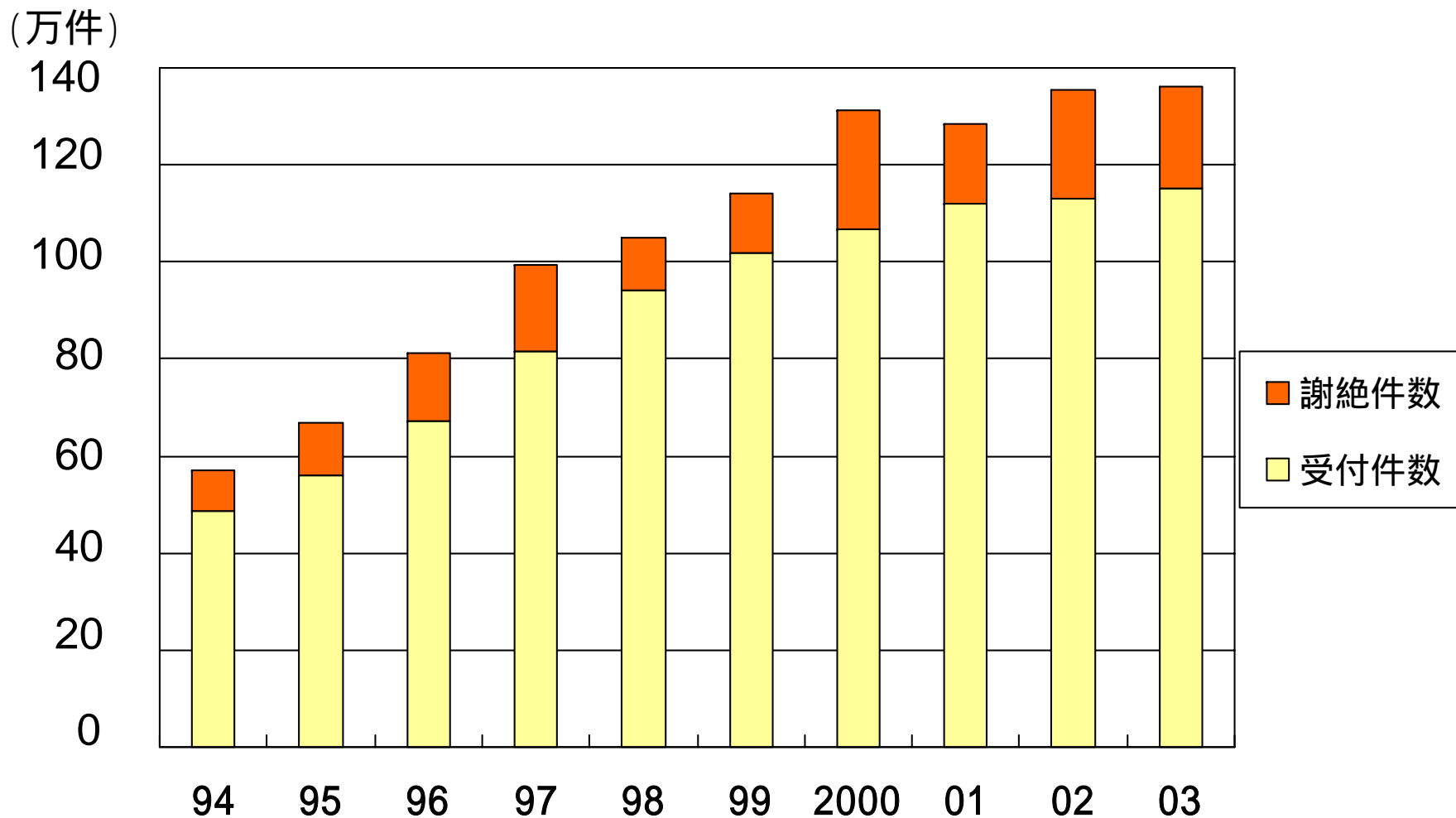
国立大学における外国の電子ジャーナル導入状況



国立大学における外国雑誌購入のための経費



1990年代における複写依頼の増加 (NACSIS-ILL統計による)



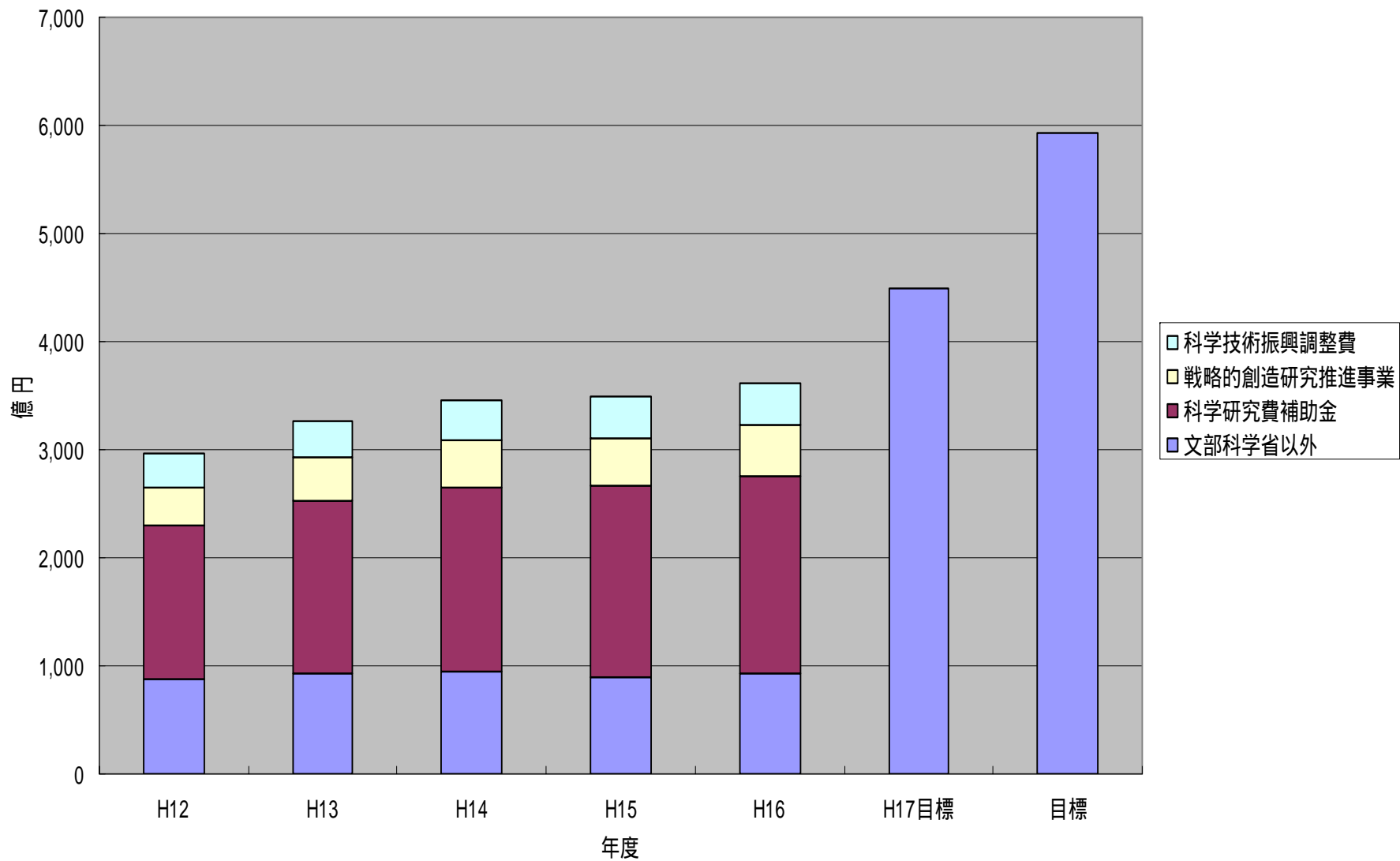
図書館間協力にも未来はない？

- 従来型モデル：
 - 利用頻度の多い雑誌は購入
 - 利用頻度の低い雑誌はILL
 - 電子ジャーナルでどう変わるか？
 - 「頻度」が測定できるようになった
 - その結果、利用単価が出る（現在、日本の国立大学では数百円）
 - ILLは数百円でおそらく赤字がほとんど
- 従来型モデルの崩壊**
Pay-per-”use”へ?? (少なくとも図書館は不要)

しかし、大学における研究自体が変貌

- 基本的なビッグサイエンス化
 - 経費がないところでは、研究できない
 - 自発的好奇心からの研究という神話の崩壊
- 授業料収入、運営費交付金、私学助成は基本的に教育のための経費
 - 国立大学の全学均一授業料(法科大学院は別)
- 研究費は「競争的資金」(JSPS, JST等)による(「間接経費の入らない研究はいらない」)
 - 目的を持つ研究が中心に？「大学の」研究ではなくなる

競争的資金



教育と研究における大学の空洞化！

図書館だけが残る？

- いずれにせよ、利用者教育は必要。あとの学習も研究も自分でやる時代。閉じ込める「箱」としての大学は蒸発
- 参考(レファレンス)は、情報氾濫の時代では不可欠(2次情報データベース、サーチエンジンも自然には使えない)
- デジタル時代の蔵書構築: PublishされたものでなくPublishするものをコレクションの中身とする(品質管理など大変だけど)